

国庁屋敷

厳島国府上卿屋敷

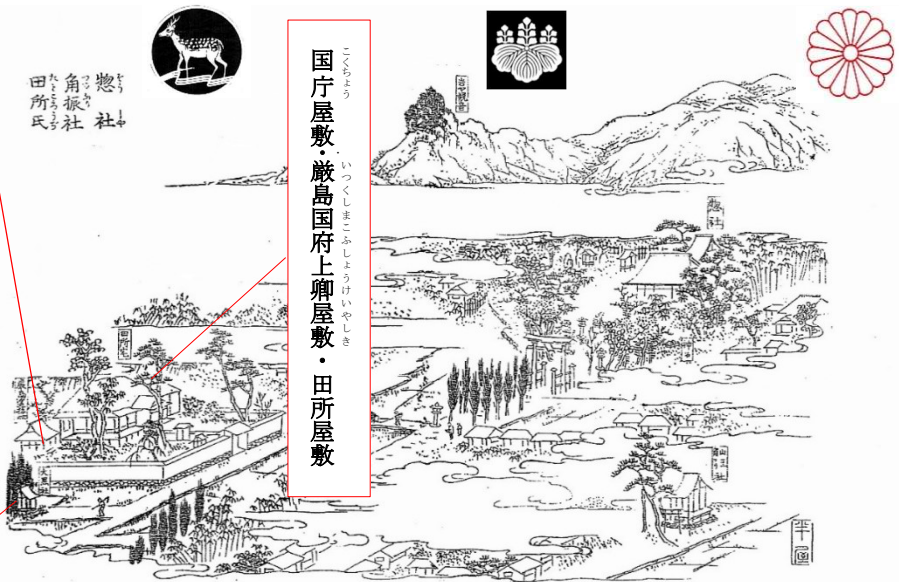
田所明神社

阿岐国造家

国立公文書館内閣文庫『楓軒文書纂』^{ふうけん} 厳島神社定勅使
祭主田所主税元教家文書所収
国立公文書館内閣文庫『楓軒文書纂』^{ふうけん} 厳島神社定勅使
祭主田所伊織元俊家文書所収
広島県重要文化財紙本墨書『田所文書』

（安芸國衙領注進状一卷・沙弥讓状一卷）所蔵

左の図は厳島図絵巻之四 府中上卿田所氏



国庁屋敷・厳島国府上卿屋敷・田所屋敷

厳島遙拝所（国庁神社・槻瀬明神）

大黒社

詳細は田所明神社公式サイト



阿岐国造家の田所氏（本姓佐伯）は、天湯津彦命五世の孫阿岐国造・
鮑速玉命の後裔である。律令制において、今の広島市佐伯区三宅町の
田所屋敷跡にて譜代の佐伯郡司を世襲した。『国史大辞典』第一卷九一
頁によると、安芸国の国衙は安芸郡府中町に国庁屋敷と呼ばれる区画
があるのが、その遺跡と思われる、その東方に惣社と呼ぶ神祠が明治四
年（一八七二）まで鎮座した。明治四年（一八七二）は誤り、正しくは
①明治五年（一八七二）である。『国史大辞典』第一四卷六八八頁に
よると、留守所は古代末期から中世前期にかけて諸国の国衙に置かれた
行政機関。国司の代官である目代が在庁官人を指揮して国の行政を行う
ようになった。『国史大辞典』第一四卷三四五頁によると、遙任といっ
て、令制の地方官に任命されながら、赴任執務するのを免除されること。
『国史大辞典』第九卷二二六頁によると、田所とは、平安時代以後、国
衙に置かれた在庁所の一つ。田所を構成する官人の肩書きは目代・惣
大判官代や書生職など、有力な在庁官人にまかせられたため、「田所職」
の名称にあるように家職として世襲される場合もあった。国衙田所は、
国司に国図と照合し、朱書で国司に勘合注申する。田所による坪付
昌泰三年（九〇〇）頃、田所佐伯資隆は、朝廷より佐西使度使・田所
昌泰三年（九〇〇）頃、田所佐伯資隆は、朝廷より佐西使度使・田所
執事職の免状を賜り、今の広島市佐伯区三宅町の田所屋敷跡より安芸国
庁屋敷に赴任した。その後田所氏は在庁官人を世襲した。安芸国では、
万寿四年（一〇二七）頃から田所氏は田所信職の時代以降、惣判官代等
の有力な在庁官人を世襲した。『田所文書』に数十町歩の所領、数十人に
及ぶ所従など、在庁官人田所氏の財産の注文が記されている。在庁屋敷
（国庁屋敷）合計二丁六反。厳島遙拝所「国庁神社・槻瀬明神」②は国庁
屋敷に社を設け、庁員一同、朝夕礼拝した。『田所文書』に国庁社（国庁
神社）造立免、合計一丁五反。国司は「国司庁宣」により目代の派遣を告
げ、目代と在庁官人の連署の「留守所下文」により国内統治機能を果た
した。田所の責任者は有力な在庁官人が任せられたため安芸国では、
田所職の名称にあるように家職として世襲された。治承三年（一一七九）
より厳島神社・惣社・松崎別宮の初申神事が朝廷より奉幣使を迎えて行
われ、後に田所氏が安芸国の国祭③として、奉幣使その後、定勅使祭主
を明治五年（一八七二）まで世襲した。厳島国府上卿屋敷の厳島遙拝所
は奉幣使と定勅使祭主の神殿である。田所明神社は、最後の正三位上厳
島神社両度初申の御神事定勅使国府上卿役祭主兼府中村南八幡別宮北
惣社も厳島と同様定勅使祭主で、後の多家神社社司（宮司）田所元善（竹
槌）により、大正五年（一九一六）一月、厳島遙拝所「国廳神社・槻瀬明神」
と大黒社の三社の御祭神を合祀され、厳島国府上卿屋敷に、田所明神
社として再建された。さらに、田所明神社は平成十年（一九九八）十月厳
島国府上卿屋敷の現在地に、宮司 田所恒之輔が自主再建した。宗教
法人ではない単立神社である。田所家は安芸国第一の旧家である。
注①正しくは、「天湯津彦命と安藝国府の歴史」七一頁 最後の厳島神社
定勅使祭主田所元善竹槌履歴書に「明治五年（一八七二）を最後に初申神
事厳島神社旧神職一同廃止セラル」とある。
注②槻瀬明神の神階は、『芸藩通志』名神考卷二、五三二頁によると、
安芸国神名帳に槻瀬明神正二位五前の位階とある。「田所氏の宅後に神
石あり、つぎのかみと称して、毎年正月三日十二月晦日、燈を献じて之
を祭る」
注③国祭とは『国史大辞典』第五卷六三二頁 官祭に対して国司が
主となって執行する祭儀としての「国祭」が見られる。